

<p>7月26日 (日)</p> <p>ヨブ記 30章</p>	<p>「神よ／わたしはあなたに向かって叫んでいるのに／あなたはお答えにならない。御前に立っているのに／あなたは御覧にならない」(20節)。泥の中に投げ込まれ、塵芥に等しい者に神は価値を見出さないのだろうか。主なる神は、土の塵で人を形づくり、その鼻に命の息を吹き入れて(創世記2:7)くださった。主なる神の命の息と共に生きる「わたし」とされて。</p>
<p>27日 (月)</p> <p>ヨブ記 31章</p>	<p>「神はわたしの道を見張り／わたしの歩みをすべて数えておられるではないか」(4節)。神は人の歩みを御覧になっておられるはずなのに、ヨブの不条理な現実をとめてはくださらない。ヨブは、神が公平な方であることを信じ、ヨブ自身の不条理を訴え続ける。苦しい現実は変わらない中でも、神がわたしたち一人ひとりの歩みを見てくださっていることを覚えて。</p>
<p>28日 (火)</p> <p>ヨブ記 32章</p>	<p>「人の中には霊があり／悟りを与えるのは全能者の息吹なのだ」(8節)。人は生きた年数に関係なく、平等に全能者の息吹が吹き入れられている。年を重ねた者が生まれたばかりの者より多めに神の息吹をいただいているのではなく、命をいただいた年数分、神と共に歩む恵みの時間をいただいている喜びの内にいるのだろう。</p>
<p>29日 (水)</p> <p>ヨブ記 33章</p>	<p>「なぜ、あなたは神と争おうとするのか。神はそのなさることをいちいち説明されない」(13節)。エリフの言葉は、敬虔な信仰者の「模範的なただしい答え」。しかし、その言葉によってエリフ自身が神に代って嘆くヨブを裁く。キリストは十字架の上で静かに殺されていっただろうか。神に見捨てられたことを嘆き叫ぶキリストの姿とヨブの叫びが重なって聞こえる。</p>

聖書日課 『からし種』 2020.7.26-8.2

<p>30日 (木)</p> <p>ヨブ記 34章</p>	<p>「知恵ある者はわたしの言葉を聞き、知識ある者はわたしに耳を傾けよ」(2節)。エリフの「ただしさ」は、ヨブの神への叫びを裁き、エリフ自身の「ただしさ」で、神を語る。全能者である神を塵と帰るだけの人間が語ることはできない。だから、ヨブは、自分自身の不条理な現実と苦しみがなぜ起こっているのかを神の前で問い続けたのだらう。</p>
<p>31日 (金)</p> <p>ヨブ記 35章</p>	<p>「あなたは神を待つべきなのだ。今はまだ怒りの時ではない」(14～15節)。人生の不条理は、神の時ではないから、抑圧されても黙るようにエリフは語る。神の時が来るまで、神はわたしたちのことは見放し、無視なさるのか。インマヌエルの神がわたしたちと共にいるという約束が十字架のイエス・キリストを通して与えられていることを心に留めて。</p>
<p>8月1日 (土)</p> <p>ヨブ記 36章</p>	<p>「神は水滴を御もとに集め／霧のような雨を降らす。雲は雨となって滴り／多くの人の上に降り注ぐ」(27～28節)。エリフの言うように神は偉大で、神を知ることはできないし、神がなさる業は誰にも分らない。しかし「悪人にも善人にも太陽を昇らせ、正しい者にも正しくない者にも雨を降らせてくれる」神が今も生きておられることを覚えて、神の恵みを受け取りたい</p>
<p>2日 (日)</p> <p>ヨブ記 37章</p>	<p>「今、光は見えないが、それは雲のかなたで輝いている。やがて風が吹き、雲を払うと、北から黄金の光が刺し、恐るべき輝きが神を包むだらう。全能者を見出すことはわたしたちにはできない」(21-23節)。今、私たちには全能者を見出すことはできないが、恐るべき輝きが神を包む時が必ずくる。普通ありえない、「北」から刺しこむ黄金の光によって。</p>